日本赤十字豊田看護大学紀要９巻１号，27－34，2014

特　集

# 被災地の環境回復ボランティアに参加した看護学生の気づき

中島　佳緒里[1]　堀野　有香[2]　大渡　佳世[2]　奥村　潤子[1]

要約

本研究は、学生が環境回復ボランティアを通して得た気づきを明らかにし、活動のための支援を検討することを目的に行われた。研究参加の同意の得られた18名を対象に、活動に参加して感じたことや学んだことについてグループインタビューを行った。その結果、＜参加の動機＞＜被災に関する気づき＞＜看護学生としての気づき＞＜ボランティアに関する気づき＞＜自己能力への気づき＞＜今後の生き方に関する気づき＞の６つのカテゴリーが抽出された。今回行った環境回復ボランティアが、学生の主体性を育むだけでなく、被災地の思いに共感すること、行動の責任と限界といった自己洞察に関与することがわかった。さらに、看護学生の場合、上位学年では被災者と患者を混同している傾向にあり、活動前後のボランティア教育の必要性が示唆された。

キーワード　ボランティア　看護学生　被災地　環境回復　活動支援

## Ⅰ．はじめに

東日本大震災の発災後、数多くの学生ボランティアが被災地を訪れている。被災地でのボランティアの経験は、共同作業や他者への支援を通して個人の創造性や協調性を向上させ、より高い社会への適応を促すことが期待されている（黒沢・日髙・張替・田島 , 2008; 茶屋道・筒井 , 2011; 飯・季・作道・山口・平野・日比野 , 2012）。日本赤十字豊田看護大学（以下、本学）においても2011年、2012年の夏季休暇を利用して、大型バスをチャーターし、ボランティア活動を展開した。

2011年の活動では、応急仮設住宅におけるコミュニティ支援としての集会所運営に関わった。ボランティアに参加した学生の学びは、被災地・被災者を中心とした自立支援活動、住民とのコミュニケーションによって生じる活動の意味づけ、参加メンバー間の相互作用に関連づけられた（中島・大渡・奥村 , 2011）。さらに、応急仮設住宅における支援活動には、看護過程と同じ問題解決思考が役立ち、専門的な知識・援助技術・コミュニケーション技術を学んでいる看護学生が有用な人材になることが示唆された。

2012年の活動は、被災地の状況も落ち着いてきており、被災者の生活に対する直接の支援よりむしろ、海岸清掃などの環境の回復・保全に焦点を当てた活動が展開された。このような活動では、活動に対する自分自身の意味づけによって、被災地でのボランティアのあり方が決まるのではないかと考えられた。

そこで本稿では、環境回復ボランティアを通して、学生がどのような気づきをしたのかについて明らかにし、活動のための支援のあり方を検討することを目的とした。

## Ⅱ．活動の実際

### １．活動の準備

ボランティアに出発する２週間前に、事前ミーティングとして６コマ（９時間）の時間を当てた。最初の２コマは、「災害ボランティアとは何か」「ボランティアの心

[1] 日本赤十字豊田看護大学
[2] 名古屋第二赤十字病院

構え」「心のケア」について、災害看護を担当する教員が講義・演習を行った。また、ミーティングやお互いのサポートがスムーズに行えるように、活動班のグループ作りを行った。2コマは、活動班ごとに活動内容を決めることや宿泊の割り当てなど、被災地で3泊4日を過ごすための日程や役割を決める話し合いに当てた。残りの2コマは、被災地の現状を理解するために使用した。そのうちの1コマは、支援を受けるボランティア団体の趣旨や活動内容の説明を行い、他の時間はボランティアに訪問する地区の被災状況や歴史・産業について調べた結果を発表した。

２．被災地での活動

活動は、5グループに分かれて、「海岸清掃･公園整備」「地域復興支援」を行った（表１）。

（１）石巻赤十字看護専門学校との交流会

発災当時に津波の被害を受けた看護学生に、避難した方々の救護活動や高齢者の介護を率先して行った体験談を話してもらった。苦しい立場にいながらも皆が支えあったこと、救護活動に当たっている看護教員を助けるために気が付いたことは何でも行ったことを聞き、同じ看護学生として実際にその立場になったとき、自分たちは同じようにできるのか、できるためには何をすればよいのか話し合った。どのグループもなぜそれができたのかを質問しており、石巻赤十字看護専門学校の学生は「赤十字の学生だから」と全員が答えていた。この交流会で聞いた貴重な話は、学生の目線で「赤十字の看護学生とは何か」を考えるきっかけとなった。

（２）海岸清掃・公園整備（東松島地区）

東松島市は、松島・奥松島を抱える風光明媚な観光地である。震災時、奥松島に位置する野蒜海岸には最大10.35ｍの津波が押し寄せ、東松島市の1/3を占める広い面積が浸水した。この地区の死者・行方不明者は986名、避難者は15,185名であった。

主に活動したのは、宮戸島の大曲浜と野蒜海岸であった。地元の特定非営利活動法人の援助を受けて、海岸清掃と跡形もなくなってしまった公園の整備を行った。また、最終日は応急仮設住宅の集会所を訪問した。応急仮設住宅で聞いた住民の話は、被災体験や健康状態を憂うものなど様々で、被災した人々が何を思い、暮らしているのかを想像する一助を得た。

（３）地域復興支援（牡鹿地区、雄勝地区）

牡鹿半島はリアス式海岸であったため、最大27mの津波が押し寄せ、小さな漁村が駆け上がった津波により壊滅的な被害を受けた。ここでは地域の災害ボランティアセンターの援助を受けて、鮫浦湾沿いの海鞘養殖の作業を手伝った。津波によってすべての船、漁具を失っているため、養殖を再開するためにはゼロからの出発であり、海鞘を出荷できるまでは3年かかると聞いた。海鞘の育成には養殖に使う貝殻選別や錘に使う土俵作り、貝殻にワイヤーを通す作業（からっこ刺し）等、多くの準備が必要となる。ボランティアでの活動は、最も人手のいるからっこ刺しであった。鮫浦湾沿いは津波の爪痕が大きく、学生達はボランティア先で、震災前に150世帯あったものの津波によって1世帯しか残らなかった話や、津波にのみ込まれた体験を、作業をしながら聞いていた。

雄勝地区は石巻市の中でも被害の大きかった地区である。雄勝湾から駆け上がった津波は町の奥まで到達し、街は壊滅状態であった。町立病院は3階まで到達する津

表１　ボランティアの全行程

<table>
<tr><th>グループ<br>日</th><th>１グループ</th><th>２グループ</th><th>３グループ</th><th>４グループ</th><th>５グループ</th></tr>
<tr><td>１日目</td><td colspan="5">午後：出発</td></tr>
<tr><td>２日目</td><td colspan="5">午前：被災地到着　　午後：石巻赤十字看護専門学校との交流会</td></tr>
<tr><td>３日目</td><td colspan="4">海岸清掃・公園整備</td><td>地域復興支援</td></tr>
<tr><td>４日目</td><td>地域復興支援</td><td colspan="2">海岸清掃・公園整備</td><td>地域復興支援</td><td>海岸清掃・公園整備</td></tr>
<tr><td>５日目</td><td colspan="5">午前：応急仮設住宅訪問　　午後：ミーティング・片づけ，被災地出発</td></tr>
<tr><td>６日目</td><td colspan="5">午前：到着</td></tr>
</table>

波を受け、多くの医師、看護師、患者が亡くなっている。また、地盤沈下のため、漁港にある防波堤は波の下にあった。ここでは、雄勝地区復興まちづくり協議会の援助を受けて、地元の店舗再開の作業を手伝った。

## Ⅲ．研究方法

### １．研究参加者

2012 年の学生ボランティアに参加した学生のうち、1 年生と 4 年生を研究対象とした。4 年生は、臨地実習が終了しており、災害看護学と災害救護演習ともに全員が受講していた。対象にはボランティア活動終了後に、研究の目的及び方法を書面を用いて説明し、1 年生 12 名、4 年生 6 名から研究参加の同意書が提出された。

### ２．データ収集方法

研究参加の同意の得られた 18 名に対して、「ボランティア活動に参加して感じたこと、学んだこと」をテーマにグループインタビュー法を用いて、学生の語りを聴取した。小集団活動に適した 6 名をひとつのグループとし、1 年生 2 グループ、4 年生 1 グループで編成した。また、インタビュアーは、学生が自由に発言できるように、ボランティア活動に参加した 4 年生の 1 名に依頼した。グループインタビューの内容は、ボイスレコーダーで録音し、逐語録を作成した。グループインタビューは、1 時間を限度に語りの内容が飽和する、あるいは参加学生が終了の意思を示すまで続けた。

### ３．分析方法

分析には質的記述的分析方法を用いた（萱間 , 2009）。分析手続きは、グループインタビューによる逐語録から、学生の学びや気づきに関する内容をスライスし、コーディングを行った。コード化した内容に沿って文脈を確認しながら、コードの命名を行った。その後、コード間の関係を考え、類似例を継続的に分析しながらカテゴリーを作成した。複数の共同研究者で分析内容の検討を行い、分析結果の妥当性を高めた。

### ４．倫理的配慮

研究に参加する学生の同意は、研究目的と内容について書面を用いて説明後、同意書の提出をもって確認した。また、学生を対象にするため、研究の不参加および途中での中止等のいかなる状況でも成績には影響しないことを確約した。加えて、ボランティアの体験を学生が語る際に心理的な負担が生じる可能性があるため、インタビュー後はカウンセラー（有資格者）が適宜インタビュアーの報告を受け、カウンセリングが必要な状況か否かを判断した。幸い、語る際に言葉が詰まる、流涙する、感情が高揚するような学生の報告は一人もいなかった。グループインタビューで得た個人情報については、すべて削除あるいは記号化し、個人情報が漏洩しないよう厳守した。

## Ⅳ．結　　果

データのコーディングにより、22 種類のコードが付けられ、その後 6 つのカテゴリーが抽出された（表 2）。括弧「　」はスライスした語りの一部を表し、【　】はコード、カテゴリーは＜＞で示した。6 つのカテゴリーは、＜参加の動機＞＜被災に関する気づき＞＜看護学生としての気づき＞＜ボランティアに関する気づき＞＜自己能力への気づき＞＜今後の生き方に関する気づき＞である。次にそれぞれのカテゴリーを構成するコードを示す。

＜参加の動機＞は、【学生であることの制限】【他者の活動への尊敬】【自分で見る価値】【ボランティアの不確実性】の 4 つのコードで構成された。【学生であることの制限】は、「もう 4 年生だし」「最後に何かやる」の語りに示されているように、就職すると自分の時間が自由にとれないことを自覚しており、残りの半年という時間制限の中で、学生時代の心に残る有意義な体験をしたい思いが込められていた。また、被災地に行くことを選択した理由に、「自分が行かないとわからない」「とりあえず行ってみる」といった被災地を【自分で見る価値】を挙げていた。一方、「ボランティアに何ができるのか」「目的を持っていく」「結局自分の利益」「被災地にどう行けばいいのか分からない」に示される【ボランティアに対する不確実性】は、多くの学生が抱いていた思いであり、ボランティア活動に参加する一歩が踏み出せない理由にもなっていた。そのような学生がボランティアに参加するきっかけとしては、東北支援の集まりや俳優のトークイベントでの発言から「同じ年代の人が行っているのはすごい」といった【他者の活動への尊敬】が挙げられた。

表２　抽出されたカテゴリー

（　）内は分類された語りの数

| コード | カテゴリー |
|---|---|
| 学生であることの制限(3) ＊ | 参加の動機 |
| 自分で見る価値(11) | |
| ボランティアの不確実性(18) | |
| 活動への尊敬(3) | |
| リアリティ(7) | 被災に関する気づき |
| 想像できない津波(6) ＊ | |
| 被災地の人の思い(12) ＊＊ | |
| 看護学生としての自負(11) | 看護学生としての気づき |
| 専門職としての見極め(9) ＊ | |
| 現地ボランティアの役割期待(3) ＊ | |
| 関係の持ち方(6) | ボランティアに対する気づき |
| 情報発信(12) ＊＊ | |
| 活動を継続する(5) ＊＊ | |
| ボランティアの意味(12) | |
| 自己本位の評価(7) ＊＊ | |
| 行動の責任(13) ＊＊ | 自己能力への気づき |
| コミュニケーションの難しさ(18) | |
| 今後の生き方に関する気づき(9) ＊＊ | 今後の生き方に関する気づき |

＊　：４年生にのみ抽出されたコード
＊＊：１年生にのみ抽出されたコード

＜被災地に関する気づき＞は、震災の影響を受けた人や場所との接触体験を指し、【リアリティ】【想像できない津波】【被災地の人の思い】の３つのコードで構成されていた。学生は、実際に被災地に立ち、自分の目で見ることで「すごい衝撃だった」「実際に行ってみると様子が全く違う」「肌で感じる」と【リアリティ】のある体験として被災地の状況を語っていた。これは活動場所に行くまでの道路や家が崩れた様子を見る、震災当初のままの状況が残された場所を見ての思いであった。同時に、瓦礫が撤去され家の土台のみになった土地に草が生えている場所を見て、「もともと何もなかった場所のようだ」と寂寥感を伴う語りがあった。この思いは震災のリアリティに欠けるため、「言われると大きな津波と感じる」「話が聴けなければ想像がつかない」など、【想像できない津波】に多くが分類された。

【被災地の人の思い】は、被災者と接することで体験した様々な内容が語られた。ここでの被災者とは、被災した看護学生やボランティア先の漁師、復興商店街の人々、宿泊先のご主人やご家族、現地ボランティアの方々であり、その出会いを通して感じたことや震災体験の話を聞いて感じたことである。それは、「ひとりひとり色々な思いがあった」「震災を忘れてしまうという現地の寂しい気持ちがある」「震災や痛みを共有する」「前向きに考え頑張っている」等、主に被災地の人たちの印象や気持ちを想像する内容であった。このコードに分類される語りはすべて１年生であった。

＜看護学生としての気づき＞は、【看護学生の自負】【専門職としての見極め】【現地ボランティアの役割期待】の３つのコードで構成された。このカテゴリーは、一般大学生と比較して看護学生の特徴を学生自身が見出している内容であった。【看護学生の自負】のコードは、「看護学生の視点」や「単純な大学生とは違う意見」など、看護学生であることが一般学生よりも被災地では優位に活動できるとの思いであった。また、１年生の語りには「使命感」が抽出された。ここでの学年の特徴は、４年生において「ニーズから自分達が何ができるか考える」「自立を促す支援」「潜在的なニーズの把握」等の被災地のアセスメントを行う視点が【専門職の見極め】としてコード化されたことである。さらに、被災地のための活動を展開するには、「現地のニーズを把握する」「ボランティアを上手く割り振る」等、【現地ボランティアの役割期待】を述べていた。

＜ボランティアに対する気づき＞は、【関係性の持ち方】【情報発信】【活動を継続する】【ボランティアの意味】【自己本位の評価】の５つで構成された。【関係の持ち方】は、「敬意や誠意を持つ」「自己満足を抑える」「押し付けない」等、被災者と接する態度、あるいは被災地でのボランティアを行う際の姿勢を表していた。また、１年生では、「被災地の現状を伝える」「自分達の頑張りを被災地の人に伝えたい」等の【情報発信】、「何度も行く」「つながる」「これからの経過を見ていく」等の【活動を継続する】のコードが抽出された。さらに、「学べれば何でもやってもいいのではないか」「自分の成長が被災地のためになっていく」「一生懸命やっていい感じ」等、【自己本位の評価】のコードも１年生特有のものであった。一方、学年に関わらず多く語られていたのは【ボランティアの意味】を問う語りであった。「誰かに何かをしてあげたい」「自分のできるところからやってみる」等、それぞれが活動を通して自分自身に問いかけた内容であり、「強い思いと行動力」「その人が幸せになる」「生きる意味」等、問いかけから導き出されたボランティアの意味であった。

＜自己能力への気づき＞は、【行動の責任】【コミュニケーションの難しさ】の２つのコードで成り立っていた。【行動の責任】は１年生にのみ抽出されたコードであり、「責任のとれないことはやっていく必要はない」「なんでもいいわけではない」「自分のできることを考える」「学生だからできることは少ない」等、上位学年のように看護学生として行動できなかった体験から、自分達１年生にできることは何かを問う内容であった。【コミュニケーションの難しさ】については学年による差異はなく、「何の話をすればいいのか」「何を聞けばいいのか」等、自分達では想像できない体験をした被災者にどのように接していいのか戸惑う姿勢がよくあらわれていた。また、「聞きたいと思っちゃいけない」「津波の話はできないな」「相手に失礼じゃないか」等、被災者の状況を一方的に解釈し、自分達の言動が被災者に悪影響を与えるといった学生の不安を反映した内容であった。

最後のカテゴリーは＜今後の生き方に関する気づき＞である。これは１年生のみで抽出されたカテゴリーで、「感じたことを生かしたい」「仲間を大切にしたい」「自分の経験を大切にする」といった今後の活動への希望や自分自身が生きる上で大切にしたい内容を示す語りであった。

## Ⅴ．考　　察

### １．ボランティア活動を通した学生の気づき

学生の体験を概観すると、＜参加の動機＞＜被災に関する気づき＞＜看護学生としての気づき＞＜ボランティアに対する気づき＞＜自己能力への気づき＞＜今後の生き方に関する気づき＞が存在した。

＜参加の動機＞では、【自分で見る価値】を１年生と４年生ともに述べており、2011年の発災以降、様々なメディアからの情報や授業でも取り上げられてきた被災地を自分自身で体験したいという単純な動機付けを表していた。学生達は、自分達に何ができるのかわからないという【ボランティアの不確実性】も同時に抱えており、被災地に行きたいけど行ってもいいのかといった両面性の思いを持っていた。ボランティア未経験の学生の半数以上が、ボランティアは「自己犠牲」の上に成り立った「献身的行動」が不可欠とする認識を持つ傾向を示しており（樋口, 2004）、このボランティアへの誤った認識が参加を躊躇する理由のひとつになっていることが窺えた。この思いは、多くの学生ボランティアが連日報道されているのを目にして、あるいは活動集会に参加し、同じ立場の学生が行っている活動に尊敬を抱くことで、一歩踏み出して自分達もやってみようという動機付けに関わっていた。特に４年生は最終学年であり、自由な時間のあるうちに被災地にいってみようという【学生である

ことの制限】がボランティアに参加する行動の後押しになっていた。このような傾向は、東日本大震災以降、被災地の役に立ちたかったが行動に移す機会がなかったという学生が多かったとする報告（飯・季・作道・山口・平野・日比野 ,2012）と一致し、潜在的な災害ボランティアへの参加意向が、震災後時間が経過しても変わらないことを示している。

＜被災に関する気づき＞では、被災地に自分の足で立ち、被災者との関わりを通して、全身で感じたことを様々な形で表現した内容であった。1年生では【被災地の人の思い】にコードされた語りが多く抽出されたが、4年生には人との関わりに値するコードはなく、同じ被災者との関わりでも＜看護学生としての気づき＞である【専門職としての見極め】に多くの語りが分類された。この学年による違いは、病院実習を履修しているかどうかの違いではないだろうか。1年生は入学してから半年しか経っておらず、人との関わりも同年代の友達関係が中心の時期である。自分達が事前に想像していた被災者の姿とは異なり、明るく笑顔で接していただいた応急仮設住宅の高齢者や、喪失体験を乗り越えようとしている地元の方々の話を聞いて、人の強さに驚くとともに、被災地や被災者に感じた様々な思いを素直に表現していた。彼らは震災体験を聴くことによって、自身の感情を揺さぶられ、被災者の思いを推し量ったり、意図的に考える体験をしていたと考えられた。そのような中、看護師としての基礎もない自分を振り返り、自分自身の限界と行動の責任を問う語りが【行動の責任】として抽出された。看護学生と意気込む学生達に現実検討をさせるのは難しかったが、被災者との関わりによって【コミュニケーションの難しさ】を体験した学生は、自分の限界に気付くことができ、自分に何ができるのか考えるきっかけになったと推測する。

一方、4年生は今回のボランティアを病院実習と同じ体験とし、被災者＝患者としてアセスメントしている傾向が窺え、「潜在的なニーズの把握」や「自立を促す支援」をボランティアの目的に掲げていた。しかし、被災者は患者ではない。被災者を援助が必要な弱者、あるいは問題を抱える人として位置づけることは、ボランティアに上下関係を生じる危険性も孕んでいる。昨年のボランティア活動では、住民を生活者としてアセスメントできる能力を備えた看護学生が、応急仮設住宅のコミュニティ支援において有用と報告したが（中島・大渡・奥村 , 2013)、これは活動する時期にも影響すると考えられた。今回のように震災から1年半が経過し、かつ海岸清掃のような環境を回復・保全するための活動では、被災地のニーズが捉えにくい。応急仮設住宅における半日という短時間の関わりの中で、ステレオタイプに被災者の健康問題を見出そうとした思考の硬さが窺えた。

＜ボランティアに対する気づき＞には、活動を通して考えた【ボランティアの意味】を示す語りが多かった。そもそもボランティア精神である「ボランタリズム（voluntarism/voluntaryism）」とは、『精神的な自由と権力など制圧に拘束されない自立を基盤とした精神であり、「一人ひとりが大切な存在として認めあえる社会を作り出す」』と定義される（石井 ,2006,p271）。学生によるボランティアは、奉仕活動や地域貢献といった利他的側面と同時に、学生自身がその活動から学びを得るという体験学習としての側面がある（黒沢・日高・張替・田島 ,2008）。短期間の活動でありながらも、「主体的に行動する」「その人が幸せになる」「生きる意味」を見出し、ボランティアの本質に近づくことができたと考えられる。1年生では【自己本位の評価】も多くみられたが、ボランティア活動を客観的に評価するのは難しく、自分自身の有能感を言葉で表現したものと思われた。今回の活動を通して、学生達の成長は確信しているものの、その客観的な評価基準は学生自身にも教員にもなく、今後、ボランティア活動の評価をどのようにするのか検討する必要があるだろう。

さらに、1年生では＜今後の生き方に関する気づき＞も多く語られた。あと半年で看護師として社会に出る4年生には語られなかった内容であり、看護学生にとってボランティアが学生の時にのみできる活動と認識されていることが窺えた。馬場他（2006）や黒沢他（2008）は、ボランティア活動の教育効果として、知的･情緒的、倫理的発達の促進、学習意欲や自身の向上、専門技術、コミュニケーション能力、責任感・公共心の獲得を挙げており、被災地におけるボランティア活動での経験がキャリア形成に有用なことを示している。活動前後にキャリア形成としての活動の意味づけを学生間で話し合う等、ボランティアが学生時代の特権ではなく、どのように看護師としてのキャリア形成に役立つかを明確にし、初期教育の中で伝える重要性が窺えた。

２．ボランティア活動の支援について

6日間の全日程において、学生達の態度は常に「自分達にできることは何か」を考え、被災地の方々に失礼がないようにと謙虚な態度を示していたが、4年生で抽出された【看護学生としての自負】や【専門職としての見極め】は、ボランティアを看護と同一とみなす危険性を示していた。本学にはボランティアの基本的な理論や理念を習得できるようなカリキュラムはない。活動に参加する前に生じていた「ボランティアとは何か」の問いに答える機会がなかったことが、看護活動とボランティアを混同した要因の一つと考えられた。避難所のボランティア活動では、ボランティアに関する初歩的な教育訓練の必要性が指摘されており（丸田,2012）、ボランティアの意義やボランティア精神を含めた初期教育を計画する必要があるだろう。さらに、災害ボランティアは、日常のボランティア活動が基本になる。災害時に特別にボランティアを行うのではなく、日頃の活動を通したボランティア精神の育成が、災害時のボランティア活動を促進するものと考えられた。これらのことから、ボランティアの基礎知識を獲得するためのボランティア論の開講、キャリア形成が異なる段階の学生に見合ったコミュニケーションや人間関係づくりの指導・訓練を大学側の活動支援として取り入れる必要があるだろう。

さらに、被災地での活動としては、ボランティアのもつ利他的な側面と共に、被災地の現状を知り、被災者との関わりから学生自身が成長する機会になることを教育側からは期待されている。今回、学生の主体性を重視したため、学生の持ち込み企画である海岸清掃や公園整備を多くの学生が体験した。しかし、海岸清掃自体の目的は理解できても、そこには被災者が直接的には関与しないために、活動主体が「Me」のままボランティアを終える結果になった。「Me」の活動は自分が何をするか、何をしたかが重要である（似田貝,2008）。昨年の応急仮設住宅での活動と比較して被災に関する気づきが少なく、4年生はこの傾向が顕著に出ていた。臨床実習を終え、常に患者という相手がある状況で思考訓練をされてきた看護学生にとって、「Me」の活動は利他的な意味づけを行うことが難しく、自己肯定感が低い状況を招いたと推察する。従って、大学側としては、高学年の学生には環境ではなく人に主眼を置いた活動の情報提供を積極的に行い、学生が学習や経験によって積み上げた自分たちの力を発揮でき、自己肯定感を高めるような活動を推進する必要があるだろう。

最後に本研究は、平成25年の東北ボランティアに参加した学生のインタビュー記録からの分析であり、一部の学生個人の背景や考え方が強く反映された結果であったのは否めない。そのため、本研究で導き出した結果を一般化するには、絶対的なデータの不足がある。しかし、今回の分析結果であるボランティア活動の有益性については、他の報告と同じ傾向であり、学生の状況を反映できたと考えられる。さらに、看護学生の場合は、学年によって気づきの傾向が異なるという新たな知見も得ることができた。今後、様々な被災地でのボランティア活動を体験する中で、活動の客観的評価や学生への支援を検証していきたい。

## Ⅵ. まとめ

本研究は、学生が環境回復に関するボランティア活動を通して得た気づきを明らかにし、活動のための支援を検討することを目的に、18名を対象にしたグループインタビューが行われた。その結果、＜参加の動機＞＜被災に関する気づき＞＜看護学生としての気づき＞＜ボランティアに関する気づき＞＜自己能力への気づき＞＜今後の生き方に関する気づき＞の6つのカテゴリーが抽出された。ボランティア活動が、学生の主体性を育むだけでなく、被災地の思いに共感すること、行動の責任と限界といった自己洞察に関与することが明らかになった。さらに、看護学生の場合、上位学年では被災者と患者を混同している傾向にあり、活動前後のボランティア教育の必要性が示唆された。

### 謝辞

学生ボランティアを行うにあたっては、現地のボランティア団体や地域復興プロジェクトの皆様に大変お世話になった。また、何よりも、学生達を受け入れ、内面的成長を後押ししてくれた被災地の方々に心よりお礼申し上げたい。

なお、本活動は平成24年度学校法人日本赤十字学園研究基金助成を得て実施した。

### 引用文献

渥美公秀 (2001). 研究・実践活動の概要と考察の糸口：2000年度 . ボランティア人間科学紀要 , 2, 35-43.

馬場由美子 , 島かおり , 大宅顕一郎 (2006). 学生のボランティア活動と社会スキルの変化に関する一考察 . 永

原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 , 36, 155-162.
樋口紀子 (1999). ボランティア教育の現状と課題 . 梅光女学院大学論集 , 32, 12-34.
飯考行 , 季永俊 , 作道信介 , 山口恵子 , 平野潔 , 日比野愛子 (2012). 大学教育としての災害ボランティア :「東日本大震災復興論」の開講 . 21 世紀教育フォーラム , 7, 11-27.
石井祐理子 (2006). ボランティア . 日本地域福祉学会 ( 編 ). 地域福祉辞典 (pp271), 東京 : 中央法規
市来百合子 , 大久保千恵 (2013). 教育復興支援ボランティア学生の経験 . 奈良教育大学教育実践開発研究センター紀要 , 22, 115-122.
琴浦志津 , 光武一成 , 田端和彦 (2012). 東日本大震災被災地における兵庫大学生ボランティア活動と災害ボランティアの課題 . 兵庫大学論集 , 17, 309-326.
萱間真美 (2009). 質的研究実践ノート . 東京 : 医学書院
黒沢幸子 , 日髙潤子 , 張替裕子 , 田島佐登史 (2008). 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長 . 目白大学心理学研究 , 4, 11-23.
丸田秋男 (2012). 東日本大震災における新潟医療福祉大学学生によるボランティア活動の実際と今後の課題 . 新潟医療福祉雑誌 , 11, 22-30.
中原一歩 (2012). 奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」. 東京 : 朝日出版
中島佳緒里 , 大渡佳代 , 奥村潤子 (2013). 仮設住宅におけるボランティア活動を通した看護学生の学び . 日本赤十字豊田看護大学紀要 , 8, 41-46.
中島佳緒里 , 大渡佳代 , 奥村潤子 (2011). 被災地の中・長期的な生活自立支援の検討 (1). 日本赤十字学園東日本大震災被災者・復興支援にかかる学生ボランティアへの支援助成金・報告書
似田貝香門 (2008). 自立支援の実践知　阪神・淡路大震災と共同・市民社会 . 東京 : 東信堂
茶屋道拓哉 , 筒井睦 (2011). 東日本大震災 5. 東日本大審査員おける学生ボランティア活動の教育的意義 . 九州看護福祉大学紀要 . 12, 25-37.
山本冬彦 , 諏訪晃一 , 渥美公秀 (2007). 人間の実践的な活動としてのボランティア：コミュニティ教育に向けて . ボランティア研究 , 8, 123-141.